



研究者名※	川端康雄	学位※	文学修士
所属※	文学部 英文学科	職名※	教授
連絡先	ykawabata@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0196608		
研究分野※	英米・英語圏文学		
研究キーワード※	英文学、文学批評、書誌、文献、比較文学、文化研究		
共同研究・競争的資金等の研究課題	・「産業文学」の再定義とその国際共同研究―産業化と脱産業化のグローバルな経験(科研基盤研究(A)2017年度～2020年度) ・新しいカルチュラル・スタディーズの基礎理論構築―残滓としての英国批評を活用して(科研基盤研究(A)2013年度～2016年度) ・構造主義の残滓としての英国批評の国際的再検討-ラスキンからウィリアムズまで(科研基盤研究(B)2010年度～2012年度) ・現代英文学におけるディストピアの表象とその批評機能をめぐって(科研基盤研究(C)2000年度～2001年度)		
社会貢献・産学官連携活動等	一般財団法人ラスキン 文庫評議員(2006年～現在)		
受賞歴			

研究領域	近現代イギリス文学・文化研究	
研究テーマ※	英語圏文学におけるユートピア／ディストピア文学の系譜とその批評機能について	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 文学ジャンルとしてのユートピアの系譜をたどってみると、20世紀に至って、従来のユートピア像の対極に立つ「反ユートピア」、すなわち「ディストピア(dystopia)」を描いた作品が多く出現していることに注意が引かれる。代表作として、ザミヤーチン『われら』(1924年)、オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』(1932年)、ジョージ・オーウェル『動物農場』(1945年)、『一九八四年』(1949年)、マーガレット・アトウッド『侍女の物語』(1985年)、カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』(2005年)といった小説があげられる。ディストピア小説は、本来理想社会＝ユートピアの理念をもとに構築されたはずの共同体が、その強大な権力機構によって民衆を管理し、不自由化するというモチーフに貫かれており、ソヴィエトやナチス・ドイツの体制を典型とする全体主義イデオロギーの脅威に反応した文学表現であった。現代においては、テクノロジーの飛躍的発展が人間の制御能力を超える地点に至ってしまったという危惧が強く自覚され、「ディストピア」を描く文学表現がますますそのアクチュアリティをもつものとなっている。 【応用例、研究の展望】 本研究では、従来ユートピア思想史の文脈で、その一変種として扱われていた「ディストピア」に特に注目し、近年のフェミニズム、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズなどの研究成果を援用しつつ、「ディストピア文学」の特質をより多角的に考察する。また、「ディストピア」を描く作品群がほぼ例外なく言語的問題に関心を示すことに注目し、「ディストピア」の言語論を展開する。さらに、20世紀終わりから今日に至るまでのこのジャンルの主要作品を取り上げて、ディストピア文学の現代的意義をさらに考察する。	

	【研究方法の特色】 言語的マテリアルの緻密な分析を基礎として、言語学における比喩形象、構造分析、ナラトロジーの手法を援用し、さらにそのテキストが生成された政治的社会的文脈に位置付けてテキストを読解するという点で文化研究のアプローチを併せて用いる。
本研究関連 特許・論文等	・『オーウェルのマザー・グースー歌の力、語りの力』(岩波現代文庫、2021年) ・『ジョージ・オーウェル「人間らしさ」への讃歌』(岩波新書、2020年) ・『ウィリアム・モリスの遺したもの——デザイン・社会主義・手しごと・文学』(岩波書店、2016年) ・『葉蘭をめぐる冒険——イギリス文化・文がうろん』(みすず書房、2013年)
共同研究・外部機関 との連携への期待	・CREW (Centre for Research into the English Literature and Language of Wales), Swansea Universityとの、Raymond Williamsをはじめとするウェールズの英語文学に関する共同研究 ・一般財団法人ラスキン文庫とのジョン・ラスキン関連資料(御木本隆三旧蔵)に関する共同研究